＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝承／副帝（カエサル）＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝第五話（A.D.356）＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

宴会の席で、【皇帝（カエサル）】ユリアヌスは訊ねた。

「……ねえ、トゥルート。僕、何やらかしたの？」

焼き豚（ぶた）にかぶりつきながら、【筆頭衛士（プリムス・リクトル）】トゥルートは答える。

「戦（いくさ）に勝ったんだよ。一万の兵に五百人で挑み、撃退したんだよ。すげえじゃん。豚肉うめえ。やっぱ蛮族も侮れねーな。兵站意識が薄いとはいえ、当座の食料は用意してあるもんな、一万人分。うわあ、喰い切れねーよ」

「でも、君、今、がっついているじゃん。いや、そうではなく、胡散臭（うさんくさ）いんだけど……五百で一万を撃退なんて……」

「胡散臭いもなにも、お前が立てた作戦じゃん。お前が成し遂げた作戦じゃん。皆騎兵で敵本陣に突撃して、**お前自身が敵の大将ぶっ殺したじゃん。**おかげで敵は総崩れ。こっちの勝ち。豚の心臓プニプニでうめえ。やっぱ、兎とは違うなー」

「野菜も食べたら？　……いいや、そうではなく、本当に僕がやったの？　いや、確かにあのゲルマン人は身なりが立派だった。あの後、一斉に敵が撤退したところからして、彼が指揮官だったのは事実だろう。でも、**僕自身が敵指揮官を討ち取ったなんて、**出来過ぎじゃないのか？　大体、ゲルマン人は野蛮人だけあって、個々の武勇を重んじる。指揮官であっても――いや、指揮官であればこそ、武勇に長けているはず。そんな相手を僕が倒したの？」

「事実は事実だ」トゥルートはうすらぼんやりした顔で言った。「おまえが『こんな都合のいい話があるはずない！』と泣き喚こうが、結果は変わらない」

　そして、トゥルートは【命の水（アクアビット）】――後に言う蒸留酒をかぶ飲みする。ギリシャ＝ローマの文明人ユリアヌスにとって、醸造酒ですら水で薄めて飲むものである。しかしながら、ガリア＝ゲルマンの野蛮人トゥルートにとって、酒精とは強ければ強い程いいものらしい。

「それに敵本陣にまで辿りつけたのは、あたしとお前ぐらいだったぜ？　で、あたしには身に覚えがなくて、見た覚えがある――あんたがキンキラ纏ったゲルマン人の首級（くび）を掲げるトコ。つまり、ヤッたのはあんたで決まり。命の水（アクアビット）、うめえ。今まで気付け薬だと思ってたけれど、塩と肉には合うなー」

「トゥルート、酔っていない？　命の水（アクアビット）は酒精が強いから……って、そうではなくて、本当に君じゃないの？」

「しつこいな。何度も言っているだろ。細かい事は覚えていないって。敵っぽい奴、手当たり次第に殺し回った覚えはあるけどさー。十倍以上の敵に突撃しろって命令されて、そんな余裕あるかよ。この羊脳うめえー」

「うん。それ、羊の脳ではなく、魚類の精巣の塩漬けだよ。美味しいのはわかるけど。あと、二十倍の敵に突撃しろという命令はたしかに僕の失態だね。本当にごめん。今後は『勝つべくして勝つ』ように努力するっていうか、トゥルート、酔っていない？」

「大体ね、あたしは巫女の素質があるって、昔から言われていたのー」

「……トゥルート、本当に酔っていない？　発言が微妙だよ？」

「何かに夢中になるとね。必ず吃驚(びっくり)する結果を出せるのよ。でもー、その間、あたしの記憶は飛ぶの。でも、しょうがないよねー。神様降りてくるもん。お婆ちゃんは村の巫女さんだったもん。しかも、あたし処女だもん。麦酒(ビール)うめえー」

「トゥルート、それ命の水(アクアビット)！　というか、絶対酔っている！！」

ちなみに他の衛士に訊ねても、彼らは恐怖に満ちた顔になり、首を左右に振るのみだった。

＊＊＊

ユリアヌスは勝ち続けた。

まさに連戦連捷である。が、理由がわからない。これは妄想ではないかと何度も頭を捻った。

脳内プラトンと脳内アリストテレス、最近加わった脳内アレクサンドロス大王と脳内マルクス・アウレリウス帝と激論を交わしたものの、やはり【真実(イデア)】は久遠の彼方であった。

いずれにせよ、勝てば、人も集まる。

黒髪の彼女と出会ったのもその流れの中であった。

その日、ユリアヌスの木槍がトゥルートの木槍にあっさり弾き飛ばされた。

「ま、参りました……！」

「よろしい。変な癖はついていないな。教えがいがあるよ」

とトゥルートは手を振る。その玉の肌には汗一つない。

対するユリアヌスは膝から崩れ落ちた。勿論全身汗だくだ。

外傷ではない。苦痛ですらない。疲労のみで倒れたのである。

――つ、強過ぎる……！

ユリアヌスは乱れに乱れた呼吸で朦朧としながらも戦慄した。

それは槍の訓練結果だった。トゥルートが『まずは力量が知りたい。好きに打ち込んでみな』と言ったので、ユリアヌスは試しに打ち込んでみた。しかし、全く当たらない。怪我をさせるつもりで薙ぎ払っても、軽くいなされる。

そこでトゥルートが反撃をしてこない事に気付いた。

僕を侮辱しているのかという怒りと、僕に遠慮しているのかという疑いが、脳裏をよぎった。が、そのどちらでもない事がすぐにわかった。

とどのつまり、腕前に差があり過ぎるのだ。

ユリアヌスがいかに槍を振るおうともトゥルートには当たらない。それ程までに差がある。だから、トゥルートは反撃もせずに教授としていたのだ。

――これ程の武人を衛士にしていれば、多少のへまでは負けない訳だ……。

ローマの集団戦法では個人の武勇は目立たない。故に不明だった勝利の一因が見えてきた。と、同時にそれでも個人の力では限界があるとも察せる。

――一介の武人に頼っていては駄目だ。もっと、機械的に、理論的に、システマティックに勝てるようにならないと……。

ユリアヌスはそのまま草原に横たわった。

瞳に映るのはライン（レヌス）川と……一昨日ついに奪還したコローニア・アグリッピナ。

すなわち、トゥルートの故郷だった。

「見に行かなくていいの？」

ユリアヌスはつい聞いてしまう。

この訓練はトゥルートから誘われた。いや元々、ユリアヌスが自分もある程度は武芸を磨かねばと考え、前々から個人的な教授を願ってはいた。しかし、トゥルートは『柄じゃないから』と許してくれなかった。

それが今日になって、トゥルートから誘われたのだ。故郷のコローニアを奪還した翌々日になって、『コローニアの郊外で、槍の手合わせをしてやる』と誘われた。

ユリアヌスもそこに因果を感じぬほど鈍くはない。

「もう見たくないんだ」

トゥルートは簡潔に言った。

廃墟と化した故郷は、もう見たくない。家族が殺された現場は、もう見たくない。

それを責める事はできない。

「わかった。筆頭衛士にだって、休息は必要だ。これまでの功績もある。許可するよ。勿論、僕は職務上、今後もコローニア内部に赴くけれど、その時は他の衛士を付ける」

「悪いな」と、トゥルートはやはり簡潔に答えた後、補足する。「あ、代わりの衛士候補に信頼できる連中を何人かまとめておく。実力もあるし経験も積ませたい奴らだ。お前も顔を覚えておいた方がいい」

「……はーい」

ユリアヌスは了承しながら、また劣等感を覚えた。今のトゥルートのような実務的な配慮を自分は出来ているだろうか？　トゥルートは自他共に認める武人肌だが、同時に経験を重ねた軍人でもあるのだ。随所で見せる知恵は、自分が蓄えた知識を、容易く凌駕する。

思わず、愚痴が零れる。

「……なんで勝てないんだろ……？」

「ま、槍があたしの【存在意義(イデンティタス)】だからな。皇帝陛下の片手間に後れを取るわけにはいかんよ」

とトゥルートは笑った。

（余談だが、このラテン語のイデンティタス／Identitas は、後にアイデンティティ／Identity と英語読みされるようになる）

ユリアヌスも認めざるを得ない。……考えてみれば、このトゥルートは馬上で槍を振るって、首級を斬り飛ばしていた。どんな刃物でも脂肪と骨格を具えたヒトの身体を簡単には切断できない。それを彼女は不安定な馬の上で行っている。

（補足すれば、当時のローマ帝国の剛剣(グラディウス)などは炭素と結び付いた鋼(はがね)も用いるが故に、青銅や純鉄を用いる蛮族に比べれば、圧倒的に優位だった。とはいえ、焼き入れ法は未発見のため、後世の長剣(ロングソード)や日本刀ほどの切れ味は無い。にも関わらず、トゥルートは野菜の様に人肉を切り捨てている。その凄まじさは語るまでもない）

――……どうやって重心を固定しているのだろう？

既に技術というよりも魔術の領域である。それだけにはっきりとわかる。

――素人(しろうと)同然の僕が勝てる相手ではない。

しかし、悔しい。できれば、勝ちたい。

「うーん、槍以外なら……」

「剣でやるか？」

ユリアヌスは初日を思い出し、肩を竦めた。

「武器の扱いでは勝ち目がないね」

「素手でやりたいと？」と、トゥルートは少し考えてから、いやらしい顔をする。「へー、この『あたし』と取っ組み合いをしたいと？　くんずほぐれつがしたいと？」

最初ユリアヌスはその意味がわからなかった。が、しばらくして頬が熱くなる。

「いや、そういう意味じゃなくて……！」

だが、トゥルートは子羊を前にした狼のように迫る。

「ま、皇帝陛下のご命令とあらばなー。仕方がないなー。……何なら、今から寝台の上でヤりますか？」

そして、トゥルートはくつくつと笑った。弟をからかう姉の気分なのだろう。

しかし、ユリアヌスにとっては別の意味で汗だくになる事態だ。

そして、彼女の声を耳にしたのはまさにその時だった。

「はーい。じゃ、わたしとくんずほぐれつしませんかー、芳紀まさに十六歳処女ですよー」

その一言にユリアヌスの顔は輝き、トゥルートの顔は濁った。
彼女が流暢なギリシャ語で話しかけてきたからだ。
二人が振り向くと、その少女は旅装を解く。
波打つ黒髪に、小麦色の肌、さらに碧玉の如き瞳が露わになる。
柔らかな目立ちに細い指先、トゥルートとはあらゆる意味で対称的な娘だった。いや、そもそもガリアやゲルマンではない。
明らかに文明がいずる【東方（オリエント）】の娘だった。
草原の陽（ひ）の下でありながら、都会の月を見た思いだ。まるで演劇のようである。
滋味あふれる美貌と光輝なる魅力――。
これが『謎のペルシャ人（笑）』、シャハラザードとの出会いだった。

＊＊＊

背教者ユリアヌスと呼ばれる青年がいる。
この青年は青年の魂のままに生き、戦い、そして散って行った。
青年は青年らしく、共和制民主主義にも青臭い憧れを抱いていた。
だから、ユリアヌスは皇帝の地位に昇りながらも、『下々の者』との交わりを絶たなかった。
共和主義者の手で、理想化された過去を信じていたのである。

故にユリアヌスは末端の兵士だけでなく民衆の意見にもよく耳を貸した。
勿論、サルスティウスなどは当初苦言を呈していた。が、初陣の奇襲を見抜けなかった記憶からか、最近は放任に近くなってきている。また、ユリアヌス自身も慣れてくれれば、どの程度まで耳を傾けるべきかという距離感も掴めてくる。
だから、コローニア奪還頃には皇帝ユリアヌスへの面談は難しくなっていた。
しかし、この自称旅芸人シャハラザードの面談希望は一発で通った。
ユリアヌス自身が承諾した。また、お目付け役のサルスティウスも追従した。ギリシャ語を話すペルシャ人という点が評価されたのである。処女云々やくんずほぐれつはさておいて、【東方（オリエント）】出身というだけで価値がある。
考えて欲しい。今、ユリアヌス達がいるのはガリア（フランス）とゲルマニア（ドイツ）の狭間だ。ところが、このシャハラザードはペルシャ（現イラン）から、はるばる来たという。
古代世界において、彼女の情報がどれだけ貴重かは言うまでもない。まして、高速伝達手段であるローマ街道が現在機能不全なのだ。
――世間話を聞かせてもらえるだけでもありがたい！

そう考えた者達が面談会場に押し寄せた。

生憎、シャハラザードがギリシャ語の会話を望んだため、その内容を理解できるのは少数だ。つまり、トゥルートにはちんぷんかんぷんである（大体ペルシャが東のどの辺りにあるのかも知らない）。が、ユリアヌスたち教養階層は興味深々らしい。シャハラザードの語る最新【東方（オリエント）】情勢に一々頷いていた。

話題が一段落した頃、サルスティウスが声を出した。

「筆頭衛士、お前からも何か質問がないか？」

――あ、暇そうなのが顔に出ていたかな……。

トゥルートは反省しつつ、彼の配慮に感謝した。

「えと、無学なので難しい事はわかりません。ただ、【東方（オリエント）】で流行りがあれば、知りたいですね」

「流行りですか……」シャハラザードはラテン語に切り替えた。が、きごちない。どうやら、使えなくもないが苦手なようだった。「そうですね、今ペルシャではマニ教が流行っています」

「マニ教？」

トゥルートが首を傾げると、ユリアヌスが助け船を出す。

「グノーシス主義の一派さ。ローマでも東の方では流行っていた」

そう、この時代――紀元四世紀のペルシャ世界はマニ教の全盛期でもあった。

とはいうものの、トゥルートはそのグノーシス主義自体を知らない。

「うーん、僕もその辺りは詳しくないから。シャハラザード、説明をお願いできる？」

「かしこまりました。ですが、わたしも詳（つまび）らかでないのは同じ事です。誤謬交じりである事、ご承知の上で、お聞き下さい」

そして、彼女が語ったグノーシス主義やマニ教の概要は以下の通りだ。

1：キリスト教徒はこの宇宙は全知全能の善なる神が創造したと語る。が、それはおかしい。全知全能の善なる神によって作られたのなら、何故、この世には悪が栄える？　また、何故、飢えや病といった苦しみが満ちる？

2：キリスト教徒はそれを試練だという。……本当にそうなのか？　全知全能かつ善なら、そんなのは省略できるんじゃないのか？　神が全知全能ではないか、善ではないか、あるいはその両方と考えた方がずっと辻褄（つじつま）が合うのでは？

3：そも古代にも善人や賢人はいた。だが、キリスト誕生前だから、当然キリスト教徒ではない。ところがこういった者達もキリスト教徒でなければ地獄行きだという。それが《神》の裁きだという。……ねえ、その《神》様って、むしろ悪魔っぽくない？

4：この宇宙の創造主が悪魔なのか不完全な神なのかはわからない。だが、善良なる神とは

言い難い。しかしお先真っ暗でもない。ヒトには知恵がある。悪を縛り、飢えを遠ざけ、病を癒す知識がある。この叡智の光で、皆、邪悪なる創造神に立ち向かおうぜ！

これに対するトゥルートの第一印象は

――なんだか、十四歳の少年に受けそうな設定だな。

だった。しかし、十四歳の少年といえば、心当たりがある。

「素晴らしいッッッッッッ！！」

予想通り皇帝ユリアヌスは絶叫していた。

概要を一通り聞き終えるや否や、興奮に身を震わせながら絶叫していたのだ。

「この世界の《創造主》は人類の敵！　故に世界は悪に満ちる！　しかし、我らには悪を悪と《認識》する叡智の光がある！　故に我らは運命に抗える！　飢餓や貧困を駆逐しうる叡知の源を授けた《蛇》＝《反逆者》は、人類の味方ではないにせよ、敵方でもない。むしろ、あの《神聖四字》さんに相対するための刃――そういう事だねっ？」

「ええ、まあ……」

シャハラザードは同意を求められて困っていた。

「旧約聖書創世記において、《反逆者》は知恵の実を奨める事で、人類を無知の闇から解放した！　すなわち《光をもたらす者》こそが《救世主》！　いずれは僕らも彼らと共に父なる神を乗り越えねばならない。親を乗り越える事こそが、子たるものの至高の孝行――人類を救うべく、天に反逆した堕落天使マラク・ターウース・ツァール・パウリンの導きこそ、実は真なる神の計画の一部であるように……！　四大元素とエーテルで武装した『最初の人間』が無知の闇に挑んだように……！　ヒトは超古代文明の遺産《龍蛇神》を象った巨人型兵器でその身を鎧うべきなんだねっ！　だから、人類は天なる御使い――天使あるいは使徒と戦う。苦難の時には光り輝く十二枚の翼を広げて！　さしずめそれが《偶像破壊者》……いや、本当の《福音》――そういう事だねっ？」

「いや、そこまでは……」

シャハラザードも最早ドン引きである

だが、ユリアヌスの熱狂は時代を超越して加速していく。

そも厨二病とグノーシス主義の相性の良さは既に万人が認めるところ（断定）っ！

その中でも特にラノベ臭が充実したマニ教である（明言）っ！

人生そのものでセカイ系厨二病を体現しているユリアヌスが心惹かれるのは必然といえよう。

「あっ、そうだ。僕ね、実は《福音書》の同人誌書いてみたんだ」

「え？　ええ？？」

ユリアヌスはシャハラザードの戸惑いに気付かないまま、ごそごそ書簡の山から一巻を抜き出す。おそらくそれがユリアヌス自作の《福音書》同人誌なのだろう。挙句の果てににこに

こ笑顔でそれをシャハラザードに手渡しやがった。

「名付けて、『エヴァンゲリオンから読み解く黙示録（アポカリプス）』！　**さ、遠慮せずに読んでみてよ！**」

「え、ええええ……は、はい」

こうなるとシャハラザードは読まざるを得ない。何しろ、ユリアヌスは皇帝なのだから。

余談だが、ユリアヌスは《福音書（エヴァンゲリオン）》のみならず、新旧の聖書を通読しており、後にそれらをもとにした著作を数々発表する事になる。

……ただし、その原案ともいうべき同人誌がどのようなものであったか？

……読まされるシャハラザードがどのような感想を抱くか？

……それについては言及を避けよう。

「それにしても、マニ教かあ、胡散臭い新興宗教とばかり思っていたけど……浅はかだった。やはり、価値観の多様性は大事だよねえ」

そして、ユリアヌスはうんうんと一人頷いた。また余談になるが、頷くだけではなかった。実際この頃から、ブリタニアでは『邪教』の祭壇が再建され、アフリカでは『異端』の宗派が復活していく。いずれもキリスト教徒によって、破壊され排斥されたものたちだ。その息吹が後世でも解かる形で蘇っていくのである。

……もっとも、えぐえぐ涙目なシャハラザードにとって、それがどれ程の意味があるのかは怪しいものだった。

列席していた将兵たちも「あ、警備の交代時間だった」「おっと、食料物資の整理があった」「近辺の地図を今の内に作らねば」「街道の補修準備をしておくか」「歳をとると便所が近くて困る」「何だか、空が青いなあ」と次々去っていく。

残ったのは上機嫌なユリアヌスと顔面蒼白なシャハラザード。そして、それを見守るサルスティウスとトゥルートだけだ。

思わずトゥルートはサルスティウスに訊ねる。

「だ、大丈夫なんですか。あれ？」

「若者らしくていいではないか」

あんたいつもそれだな――と思ったが、さすがに言い方を変える。

「それにしたって、限度があるでしょう。以前より明らかに酷くなっていますよ……」

「飢えているのだ。やむをえまい」

「飢え……ですか？」

肉体的な空腹でない事はさすがにわかった。だが、今一ピンとこない。

サルスティウスはさらに説明を続ける。

「ユリアヌス様は元々ギリシャ哲学に傾倒し、また才能を示されたお方だ。故に本来は話し方一つとっても実に深淵である。勿論、そのまま学問の道を歩まれるなら、それでもよかった。しかし、今のユリアヌス様は皇帝であり、将軍でいらっしゃる。軍人としての己を無理やりに

でも取り繕わねばならぬ。そのために己本来の玄学を衒学として遠ざけていらっしゃるのだ。むしろ、トゥルートよ、お前のような無学で無教養だが、それ故に実戦的で実践的な話し方を習おうとされている」

だから、進んでトゥルートと話し、また、なるべくトゥルートに合わせようと必死なのだという。

「が、本来はあのような高雅な話法を好まれる。故に教養ある話し相手に飢えていらっしゃるのだ。そもそもギリシャ語自体、この西方(オクシデント)では珍しい。私とて、ガリア諸語に精通する反面、ギリシャ語は得意とは言い難い」

つまりその飢えがシャハラザードに圧(の)し掛(か)かっているのだという。

「……そういや、アンミアヌス様とも時々盛り上がってますね」

「同じ理屈だな。まして、美しい少女が話に付き合ってくれるともなれば、嬉しくないわけがない」

「……」

トゥルートは面白くなかった。ユリアヌスのくせに生意気だ。

「元々ユリアヌス様は働き過ぎだったのだ。ここで一息吐いてもらった方がいい。ペルシャ人というのが気になるが……いや、かえって好都合かもしれんな」

サルスティウスの最後の一文も、この時はまだ大した意味を持っていなかった。

＊＊＊

シャハラザードは夕暮れ時になってもユリアヌスの著作が読み終わらなかった。

当の本人は「あ、僕は皇帝業務があるから。読み終わったら、是非感想を聞かせてね！」と凄まじい台詞を残して去っていった。

となれば、読まざるを得ない。あの『エヴァンゲリオンから読み解く黙示録(アポカリプス)』を。十四歳の少年の心は鷲掴みだが、十六歳の少女シャハラザードには辛すぎる一品を……。

「えぐえぐえぐ」

と涙目なのはまだマシで。

「ははははは、エヴァンゲリオンがー、福音の戦士がー、新たなる世紀でー」

とやや危ない発言を繰り返し。

「人は愛を紡ぎながら歴史をつくるのよ。もしも二人逢えた事に意味があるなら。だけどいつか気付くでしょうその背中には、遥か未来目指すための羽根があるんだって。迸る熱い感情(パトス)で、この宇宙(そら)を抱いて輝く、誰よりも光を放つ神話になればよろしいのよー」

悲しみがそして始まるのーとかシャハラザードは色々とギリギリな事を言いやがった。

最早トゥルートは見ていられない。

「おい、しっかりしろ！」
しかしながら、シャハラザードはこれこそ自由を知るためのバイブルだと言わんばかりに、ユリアヌスの著作を握り締めた。そして微笑む。
「ふ。じきにあなただけが夢の使者に呼ばれる朝が参りますわ」
「返ってこーい！！」
トゥルートはシャハラザードの薔薇色の頬を引っ叩く。
すると、彼女はハッと正気に戻った。
だが、見る見る間にまたも泣き虫弱虫諸葛孔明ならぬ泣き虫弱虫シャハラザードになり、
「ふえええええん」
とトゥルートに抱きついてきた。
仕方がないので妹を慰めていた時のようによしよしとあやす。
「こっちも経験あるんだけどさ。ああいう時は『ウザい。キモい。オタク死ね』でいいから」
「え、でも、それじゃあ」
「いいや、はっきり言った方がいい。変に期待させるとお互い不幸だ」トゥルートは断じた。
「ユリアヌス……様だって、嫌がられていると早めに知りたいはずだ。傷が浅くて済むからな」
「……優しいんですね」
シャハラザードは涙を拭いた。
「ええと、衛士の方でしたよね？」
「ああ、筆頭衛士だ」
「……うん。美形だし、こっちでもいいか」
「は？」
それは奇妙な発言だった。後から考えれば、油断だったのだろう。トゥルートはユリアヌスの影響でギリシャ語も多少は理解できるようになっている。だが、見た目はゲルマンである。軍用ラテン語を理解する程度と思われてもおかしくない。
「わたし、処女なんです」
「あ、そう……。たしかにそう言っていたな」
何だか尋常ではない流れになってきた。トゥルートにもそれはわかった。
「だから、あなたに捧げます」
「はいっっ！？」
シャハラザードはいきなり服を脱ぎ始めた。それだけではない。トゥルートが戸惑っていると、こちらの服の下に手を伸ばしてきた。
――こ、こいつ、何を考えているっ？
余談であるがトゥルートはモテる。男装の有無にかかわらず、年頃の少女から迫られた事は

一度や二度ではない。
だが、ここまで積極的で容赦なく、手際がいいのは初めてだった。柔らかな太股を絡ませ、豊かな乳房（ちぶさ）を押しつけられると、全身から力が抜けていく。
「ちょ、もうやめ……！」
しかし、シャハラザードは躊躇（ためら）わない。妖しい手管でトゥルートの肌を蹂躙する。
「ああ、素敵な方、たくましい手足、たくましい胸板……胸板ではない？」
そこで初めてシャハラザードの動きが止まった。
弾力溢れ、絶妙な触り心地をぷにぷに調べ始める。そして……。
「あ、あなた、女の子なの？」
「……」
長い長い沈黙が訪れる。
だが、シャハラザードは先にそれを破る。
「ま、いっかー」
「よくねーよ！！」
トゥルートは『続き』をしようとする変態を蹴り倒した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝第六話（A.D.356）＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

しかし、シャハラザードは蹴り倒されてもめげない。
「きゃー、ブトゥール姫？　薔薇の微笑のファリザード？　いえ、どっちでもいいわー、武芸百般な男装美少女萌えっ！」
「……」
繰り言だが、トゥルートは女にモテる。
だから、言い寄ってくる女のあしらいは手慣れている……つもりだった。しかし、
――この女……腐ってやがる！
ユリアヌスよりも数段タチが悪い。というか、教養人というのは皆こんな連中なのか？
蔑みの視線を向けると、彼女は嫣然と微笑んだ。
「ふふ、胸を触った時、勃（た）っていまし……」
トゥルートはそれ以上言わせまいと駆け寄る。が、その時だった。
笑顔のユリアヌスが現れたのは。
「やあ、シャハラザード。感想を聞かせて……」
「……」
「……」
「……」

再びの沈黙が訪れる。だが、ユリアヌスの目に映るのは半裸のトゥルートが半裸のシャハラザードに駆け寄っている光景だ。半裸の少女が半裸の少女を襲っている光景だ。

「……ああ、うん。いいんだ。うん。僕は祝福するよ。でも、程々にしておきなよ。それと、キリスト教徒は同性愛を毛嫌いしているから……」

「違うわっ！」

トゥルートが否定しつつも、かえって好都合だと腕を伸ばす。

シャハラザードの細い首を握った瞬間、しかし、ユリアヌスから別の声音が飛ぶ。

「トゥルート……！」

「口封じだよ。決まってんだろ」

「……僕がそれを許すと思う？」

「ちっ」

とトゥルートは舌打ちした。後にユリアヌスはその慈悲と寛容で、キリスト教徒からも賞賛される男だ。そんな理由での殺人を認めるはずもなかった。

「シャハラザード、とはいえ、僕にも皇帝の責務がある。もし、ローマの【筆頭衛士（プリムス・リクトル）】が実は少女だなどという噂が流れれば、軍律を乱す。重罪だ。僕自らの手で殺さねばならない。……そんな悲しい事はしたくない。わかってくれるね？」

「え？……は、はい」

シャハラザードはこくりと頷く。

ここでトゥルートも腕を離した。正直、このペルシャ娘はまったく信用できない。しかし、ユリアヌスが軍律の視点で、男装を庇護すると言ったのだ。これ以上、悩んでも無駄であろう。

ユリアヌスはあからさまに頬を緩める。

「でね。先程、軍議で決定したんだけど、僕らは一度セノネス（ガリアの有力氏族セノネスの主邑アゲディンクム、現在のフランスでいえば、中央部のサンス）に戻って冬営に入る。トゥルート、準備を初めてくれないか？」

「了解。それと要請ではなく命令しろ。責任の所在が不明瞭になる」

「はーい。で、シャハラザード、君はどうする？」

ペルシャ生まれにとって、ガリアの冬は辛いはずだ。しかし、ローマ軍の冬営地なら、幾分過ごしやすい。ローマ軍としても、冬営中は娯楽不足に陥るので、旅芸人のシャハラザードに来てもらえると助かる。

「需要過大で供給過小だからね。旅芸人には稼ぎ時だと思うよ。それに僕個人も君から東方事情を色々教わりたい。また『君の仕事』にとっても好都合なんじゃない？」

最後の一文にシャハラザードは何故か顔色を変えた。だが、彼女はすぐに済まし顔に戻って、優雅に一礼する。

「かしこまりましたわ。ぜひ、【皇帝陛下（カエサル）】のお傍に……」

後から考えれば、この承諾がシャハラザードの運命を大きく動かしたのだった。

＊＊＊セノネス（現サンス）籠城一日目＊＊＊

「……囲まれちゃったね」

視察を終えたユリアヌスは一言で総括した。

「ああ。しかもこっちの兵士は少ない。打って出るのは難しいな」

トゥルートも歴戦の経験から、端的に分析した。

ユリアヌスは冬営前に兵士を各都市（この時代は簡易城砦を兼ねている）に分散させた。戦力集中の原則からは外れるが、しかし、近代以前の常識でもあった。

冬営とは言わば、軍が行う冬籠りである。何しろ、古代の冬は戦闘以前に行軍すら難しい。そも餓死への対策を立てねばならない。だが、万単位の兵士を集中させておけば、周辺一帯の食料備蓄を食らい尽してしまう。戦う前に飢え死にしてしまっては話にならない。だからこそ、ユリアヌスも奪還作戦のために集中させた戦力を、今度は冬営のために分散させたのだ。

しかし、そこを蛮族軍に囲まれたのである。

「こういう事ってあるんだね。歴史書を読んでも冬の間は戦争って一時中断でしょ？　勿論、無理に奇襲する事もあるけど、移動するだけで餓死と病死と脱走が続出で、戦う前に大敗するから……」

「……とお前の場合は恐れ過ぎたな」

「ううう」

ユリアヌスは泣きそうになった。事前の勉強では冬営の重要性を深く学んだつもりだった。冬営を軽視すれば、大量の兵士を失うだけではない。規律や英気が損なわれる。特にガリアやゲルマニアの冬は厳しい。低緯度育ちのユリアヌスには想像できない苦難が待ち受けているに違いない。

だから、早めに準備して、早めに行動した。

……そしたら、早め過ぎて、蛮族に包囲された。

「ま、こういう事もあるさ。戦う事ばかり考えて、補給や宿営を疎かにするよりはマシだ」

「楽観的だね」

優しいねと言ったら怒られそうなのでユリアヌスは言葉を選んだ。

しかし、トゥルートは整然と説く。

「敵が動ける寒さという事は味方も動ける寒さという事だ。あたしら自身は動けないが、他の味方が籠っている都市も目と鼻の先。そして、包囲している蛮族軍は少数ではないが、攻城兵器もない」

よって、こちらは数日耐えればよい。そうすれば、味方の援軍が駆け付ける。城内と城外からの挟み打ちで、蛮族軍を殲滅する事も出来る。

「もっともその前に蛮族軍がここから立ち去るかもな。連中だって早めに冬営に入りたいのは同じだ。蛮族は行き当たりばったりだが、逆に言えば、臨機応変。消耗が激しく挟撃の恐れもある城攻めを続けるかは疑わしいね」

「……うん。とりあえず城内の物資を確かめておこう」

ユリアヌスは悲観的だった。冬営中も各都市との連絡は欠かすつもりはなかった。だから、食料はまだ十分には運び入れていないのだ。

＊＊＊セノネス（現サンス）籠城五日目＊＊＊

残念ながら、悲観は的中した。

援軍が来ないのだ。城内でも規律は保たれているものの、不安は漂いつつある。

しかも理由がわからない。トゥルートが言った通り、まだ動けない程の寒さではない。雪もない。連絡も欠かしていない。……これで友軍を救援しない理由があるだろうか？

――まさか、敵を恐れている？　馬鹿な！

ユリアヌスも籠城戦はこれが初めてだ。しかし、『籠城側は有利』と教科書にある通りだった。明らかに数では勝る敵の攻撃を、ユリアヌスの稚拙な指揮で何度も撃退している。これで城外から味方が来れば、蛮族は一網打尽だ（さらに、蛮族側の食料物資が手に入るので冬越しも楽になる）。子供でもわかる理屈であり、ユリアヌス並みの素人でも達成可能な作戦だ。

――それとも、城外の味方はそんなに無能なのか？

つい、ユリアヌスは身近にいた高齢の軍人に尋ねる。

「一番近くにいる味方は？」

「へい。【騎兵長官（マギステル＝エクイツム）】マルケルス様でげす」

「……高官だよね」

何しろ、【騎兵長官（マギステル＝エクイツム）】と言えば、共和政時代からの名職だ。いわゆる【独裁官（ディクタトル）】がローマ伝統の主力とされた歩兵を司ったのに対し、【騎兵長官（マギステル＝エクイツム）】は文字通り騎兵を司った。後に【皇帝（インペラトル）】へと繋がった【独裁官（ディクタトル）】に比べると影が薄いものの、高官である事は間違いない。何より騎兵なら援軍にうってつけじゃないか？

「……どんな人物かは知っている？」

「へい」とその高齢の軍人は答える。今気付いたが、この老人訛りが酷い。「弓や槍の腕もいいですが、特に馬の扱いが見事でげす。わしも若い頃はよく遠乗りを競ったものでげすが、今ではもう敵わんでしょうなあ……。そして、お子さんが可愛い。多少やんちゃでげすが、いや、男の子はあれくらい元気な方がいいでげすなぁ」

「……」

ユリアヌスは返答に迷った。聞きたかったのはマルケルスの指揮官としての性質だ。一武人としての性質ではない。ましてや、一私人としての性質など聞いてはいない。

――いや待て、それを知っているこの老人は何者だ？

「ええと、ご老体、名は？」

「へい。セヴェルスと申します」

「経歴は？」

「へい。私の生まれは……」

とセヴェルス老がつらつら語った。内容は正直わかりにくかった。訛りが酷いだけではない。話の中身は具体的なのだが、いかんせん散文的なのだ。はっきりいって無学である。抽象という概念自体を知らないのかもしれない。論理を重んじるギリシャ哲学者ユリアヌスとの相性は最悪といってよかった。

だが、聞いている内にユリアヌスは戦慄する。

――ちょっと待て。凄い経歴じゃないか！　歴戦の勇者といっても過言ではないぞ！

しかも、セヴェルスは騎兵部隊では最古参らしい。そのため、騎兵長官マルケルスとも若い頃からの知己らしい。

らしいらしいと続くのは、話が聞き取りにくいからである。

はっきりしているのはトゥルートを先任軍曹、サルスティウスを准尉とするなら、このセヴェルスは『最先任曹長』だったという事だ。そろそろ新米が抜けるとはいえ、ユリアヌスなぞ、所詮少尉みたいなものである。この老人に嫌われたら、仕事にならない事は間違いない。

正直ちょっと権高すぎたかと後悔する。

――数合わせの復帰兵（エウオカトウス）だとばかり思っていたからなあ。

一兵卒あがりだが、それだけに経験豊富だ。ユリアヌスとしてはじっくりと教えを乞いたいぐらいだ。いや、実際この辺りは聞いておきたい。

「ご老体……マルケルスは何故来ないと思う？」

「へえ。わしも不思議でげす」

「戦術的に見て救援に来ない理由はないと？」

「……あのマルケルスなら、真っ先に駆けつけてきそうなものでげす……」

「エウセビウスという名に聞き覚えは？」

「？　そういえば、マルケルスの館で聞いた覚えが……」

――最悪の想像が当たったらしい。

「全員に通達！」

ユリアヌスは腹の底から声を出した。

「明日から食事の量を半分に減らせ！」

これにはローマ軍も混乱した。それはそうである。たしかに食料に不安はある。だが、援軍さえ来れば、状況は一気にひっくり返る。大体、その前に城壁が突破されたら、おしまいだ。それを避けるためには、むしろ充分な栄養補給が求められるのでは？

そんな諸々の声をユリアヌスは

「これは【皇帝（インペラトル）】としての勅命である！」

と黙らせる。だが、アンミアヌスが

「意見具申！」

と声をかけてきた。ユリアヌスは嫌な予感がしたものの、一応「差し許す」と伝えた。

「奇襲をかけてみてはいかがでしょうか？」アンミアヌスはむしろ嬉々と語る。「幸い、騎兵の扱いならば、ガリア屈指のセヴェルス殿もおられます。さらに陛下ご自身は先の戦で二十倍の敵軍を打ち破った程です。皆騎兵で挑めば、勝算は高いかと……！」

この意見に周囲の将兵は沸き立つ。

しかし、ユリアヌスは頭痛がしてきた。あの戦捷以来アンミアヌスにはユリアヌスを英雄視する傾向があった。が、今回のこれは酷い。あんな奇襲を二度も三度も成功させろというのは無理だ。

大体にして、

――騎兵ではローマ帝国を支えられない。

とユリアヌスは考えている。

――少数精鋭による一点突破では敵戦力の撃退はできても、広大な領土の治安維持なんてできない。

という事情もあるからだ（もっとも、後に中世の暗黒がそれを常態にしてしまうのだが）。

では、どうやってこの意見を退けるか？　しこりを残さぬように奇襲を却下する方便を黙考していると、意外にもセヴェルスが先に口を開く。

「いや、それはやめておいた方がいいでげす」

「何故だ？」

「敵兵の死体を数えてみたのですが、実はそんなに多くはないんでげす」

セヴェルスは嫌な現実を突きつけてきた。ユリアヌスが来てから、ローマ軍は何だかんだで勝ち続けている。ところが、敵兵の死体は多くないという。つまり、蛮族は負け続けているというより、『闘うと被害が大きくなりそうだから、あえて、退いているだけ』だという。

「今まで我々は勝ってきたのではなく、勝たされてきたのだと？　コローニアも取り戻せたのではなく、取り戻させられたに過ぎないと？」

ユリアヌスが尋ねると、セヴェルスは「へい」と頷いた。

皇帝陛下のお力を侮るとは不敬では？――という声もあった。が、ユリアヌス当人には納得できる答えである。実際、奪還したコローニアも既に廃墟だった。蛮族にすれば、価値のない

土地を譲ったに過ぎない。連戦連勝の真相としては妥当なところだろう。

「ですが、今回は違うでげす。蛮族も腰を据えて、このセノネスを包囲しているでげす。仮に奇襲を仕掛けても、今までのように途中で退いてはくれねでしょう。少数の騎兵で仕掛ければ、相手を追い散らかすどころか、逆に……」

城外で囲まれて袋叩きに遭う――そんな予見が将兵に沈黙を齎した。しかし、

「矛盾しているではないか！」

とアンミアヌスが声を上げる。

「蛮族は今まで負けてきたのではなく、ただ退いていただけだという。なるほど、彼らは我らと違い、計画的ではない。その分、目的を機敏に変更できる。だから、これまで被害の抑制を第一にし、柔軟に撤退してきた――それはあり得る話だ。しかし、それでは何故、今回だけは被害が大きくなる攻城戦を続ける？」

これはトゥルートも指摘した事実だ。誰にでも予測でき、まだ実証もされている。

「それは……わからねえでげす」

素直にセヴェルスは認めた。

これにはアンミアヌスの気勢が削がれたらしい。声音を穏やかなものに変える。

「そもそも、攻城戦を何故続けるか以前に、仕掛けてくるという時点で意外だな」

「そうでげすか？」

「ああ」と、アンミアヌスは頷く。「国境を侵すゲルマンと言えば、まず『略奪目当ての強盗集団』と私は思っていた。楽に儲けたいという連中だとな。故に根気のいる城攻めは最初から避けると考えていた。しかし、奇妙だ。今、この城を囲んでいるゲルマンはむしろ『武装した難民集団』に見える」

そして、強盗と違い難民ならば、機敏に目的を変更することもない。その分、時間のかかる攻城戦も厭わない。それが目の前で起きている現実なのだろう。

「ふ。所詮、私の知識は紙の上のものだったという事か」

アンミアヌスの自嘲はユリアヌスの耳にも痛かった。アンミアヌスの判断も、思考と欠陥も、ユリアヌスにそのままあてはまる。

しかしそこでセヴェルスが助け舟を出す。

「いや……蛮族も変わっているのかもしれねえげす。それはわしらにはわかりませんが、アンミアヌス様たちには、かえってよくわかるのかも……」

「……どういう意味だ？」アンミアヌスはユリアヌスの心中を代弁した。

「わしらはここでずーっと蛮族と戦ってきたでげす。んで、その間に蛮族も少しずつ変わっていたのかも。けど、わしらは毎日のように顔を突き合わせてきたでげすから、その変わり方が少しずつ過ぎて気付かなかった。逆にアンミアヌス様は昔の本とかで、蛮族の勉強をばしたんでそ？　だから、頭に昔の蛮族があるままで、目で今の蛮族を見た。だから、昔と今の違いが

かえってよくわかるのかも……」

「なるほど、人間の顔は毎日変わる。しかし、その変化は微細すぎて、毎日会っている者には気づかれない。ところが、十年ぶりに会った者は、その微細な変化の蓄積を一度に見る。故にかえってよくわかるという訳だな？」

セヴェルスがいかにも好々爺という顔で頷く。アンミアヌスも「うむ、面白いな」とこんな時に学者肌の本質をあらわにした。

勿論、ユリアヌスも面白かった。この二人は性質が違う故に、相性がいいのかもしれない。故に皇帝として発言する。

「よし。蛮族の変質はたしかに考慮すべきだ。セヴェルス老、籠城中は騎兵の出番は少ない。アンミアヌスと共に蛮族とその変質について協議せよ」

……余談になる。

このアンミアヌス・マルケリヌスは『歴史（Res Gestae）』の著者として、後世に名を刻む。あの『ローマ帝国衰亡史』の著者エドワード・ギボンにも絶賛され、同書の中で『歴史（Res Gestae）』はしばしば引用される程だ。

しかし、アンミアヌスは歴史家ではなく、予言者になりたかったのかもしれない。

彼は、この時のユリアヌスの命令に、生涯を賭けて従ったといってもよい。

蛮族の侵略の本質と変質、ローマ帝国を襲う脅威をほぼ正確に見極めたのだ。

だが、その予言は活かされなかった。

彼が『神の鞭』の正体を把握した時、既にユリアヌスは現世におらず……。

古代世界には最早滅びへ抗う力が残されていなかったからだ。

そして、一週間が経っても味方は来なかった。

だから、ユリアヌスはサルスティウスとトゥルートに決断を持ちかける。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝第七話（A.D.356）＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＊＊＊セノネス（現サンス）十日目＊＊＊

密室で一匹の蛇を三等分に切り別ける。

ユリアヌスは不器用な腕で何とかその作業をこなした。

それをサルスティウスとトゥルートに配ると、二人とも躊躇わずに口に運んでくれた。

――僕は恵まれたな。

自身も焼いた蛇の肉を口に運びながら、改めてその事実を噛み締める。城の食糧が心許ない今、動物性蛋白質は貴重である。捕えた蛇を差し出してくれた兵士といい、それを別け合える側近といい、間違いなく恵まれている。

無言の食事を終えると、どこか神々しい気配が漂う。

それを見計らって、ユリアヌスは言った。

「僕達三人はガリアのために戦う同志だ。そうだよね？」

「何だよ。いきなり」トゥルートは少し照れたように、しかし、即答する。「その通りだよ。こっちは故郷を荒らされているんだ。手段はともかく何とかしたいと思うのが、普通だろ」

ユリアヌスにはその言葉に眩しく思えた。それはサルスティウスも同じらしい。

「私も【筆頭衛士（プリムス・リクトル）】と同じです」とサルスティウスは目下であるトゥルートに倣った。だが、言葉を補うことも忘れない。「それがローマ帝国と正帝陛下への忠誠でもあります」

ユリアヌスは大人の気苦労を察した。が、直言を避けるわけにもいかない。

「では、伝えよう――問題は戦術ではなく政局だ。それも悪い意味でね」

これに対するトゥルートの反応は「は？」で、サルスティウスの反応は「やはり」だった。

「サルスティウスはわかっているようだね」

ユリアヌスは声が重くなった。

わかっていながら、どうにもならなかった事がはっきりしたからだ。

「トゥルート、君は先程『こっちは故郷を荒らされているんだ。手段はともかく何とかしたいと思うのが、普通』と言ったね。けれど、そうではない考えの主もいるんだよ」

【騎兵長官（マギステル＝エクイツム）】マルケルスもその一人というわけですか……」

サルスティウスは苦々しく呟いた。彼にしては思い切った発言だろう。

一方、トゥルートは眉を顰める。

「……？」

「マルケルスがこのセノネス（現サンス）の包囲に気付いていないはずがない。何しろ、僕は何度も救援命令を四方八方に送っている。それなのに一向に反応がない。これは僕らの危機を察知できずにいるのではなく、あえて僕らの危機を無視していると考えるべきだ」

「いえ……マルケルス氏以外からの救援もありません。と、なれば、意図的かつ強権的な隠蔽工作も考えるべきでしょうな」

男二人のやり取りにトゥルートは思わず叫ぶ。

「何でだよ！　そんなことされたら……！」

「僕に死んでもらうためさ」

ユリアヌスが色々なものを諦めた声で答えた。

＊＊＊

トゥルートは絶句した。

サルスティウスはまずそんなトゥルートに告げる。

「トゥルート、お前に衛士（リクトル）を任せた理由はいくつかある。しかし、最大の理由はその若さだ。若さ故にこの手の政局とは無関係だったからだ」

次にサルスティウスはユリアヌスへと向きを変える。

「ユリアヌス様、お許し下さい。この者以外にエウセビウス氏への追従やコンスタンティウス陛下への讒言がないと確信できる者がいなかったのです」

「ああ、なるほど。君の深慮には常々感服させられる」

……トゥルートとしては男同士でイチャついていないで、こちらに説明して欲しい。

そんな視線を感じたのか、ユリアヌスは顔を引き締める。

「正帝コンスタンティウスの周囲には僕を殺したがっている一派がある。宦官エウセビウスはその首魁だ」

「……理由は？」

「複合的なんだが、まずは僕にキリスト教徒ではない疑いがかかっている」

「へ？　おまえキリスト教徒じゃなかったの？」

トゥルートは驚きのあまり蓮っ葉な口調になっていた。サルスティウスがいる事をすっかり忘れていた（幸いにも、東洋でいう『不臣の礼』であると、解釈してくれたようだが）。

「だってお前、聖書は好きじゃん？　たまに引用するしさ。神学講義に顔を出した時は成績も評判はよかったろ？」

そもそも、ユリアヌスの勤勉さと質実さ、堅忍不抜の精神は清廉なキリスト教修道士を髣髴とさせる――後世下されるそんな評価を既にトゥルートは予見していた。

トゥルートのキリスト教についての知識は乏しい。

ただ、ケルン（コローニア）の外れに住んでいた一人の修道士の事は覚えている。彼は厳格な戒律に従い、日の出のはるか前に起き、数時間も神に祈り、読書と瞑想を行っていた。そして、日が昇れば、後は日が沈むまでひたすら畑仕事をしていた。それを彼は誰も見ていない、誰も咎める者がいない中で何年も続けた。飲酒を避け、粗食を貫き、無駄口一つ言わずに水を運び、土を耕した。その結果、当時既に始まっていた戦乱で荒れ果て、誰もが見放していた不毛の耕地を幾つも蘇らせた。

これこそ奇跡、彼こそ聖人――と讃える声も少なくなかった。

何時間も祈りに捧げる馬鹿馬鹿しさや、神は一つだのいった戯言には、首を傾げたが、

――あんな働き者の妻になる女は幸せだ。

とトゥルートも素直に思ったものだ（妻がいない理由を知らなかった）。

憧れて……もいた。辺境のコローニアには、良くも悪くも野卑な大人が多い。たまに見かける教養人も口数ばかりの輩だ。黙々とやるべき事をやり抜く修道士がいれば、憧れるなという方が無理だ。

そして、ユリアヌスの働きぶりは、概ねあの修道士に通じる。軽薄や饒舌という悪癖はあるものの、明日から修道士に鞍替えしてもおかしくない印象すらある。

だから、ユリアヌスもキリスト教徒に違いない――と思っていた。そんな旨を伝えると、

「ああ、キリスト教の聖職者が皆そのようであれば……」

サルスティウスは何故か溜め息を吐いた。そして、ユリアヌスが続ける。

「うーん、僕もギリシャに留学するまでは、キリスト教徒に『保護』されていたし、キリスト教徒に『教育』してもらったからね。勉強した新プラトン主義も、キリスト教の影響が強い。そも、キリスト教自体がギリシャ＝ローマ文明の影響を受けているし。だから、僕がキリスト教徒に似ているのは自然だよ」

しかし……と、ユリアヌスは明言する。

「僕はキリスト教徒ではない」

この一言にサルスティウスが身体を振るわせた。

「殺された僕の父も『異教徒』だったんだ。熱心な多神教徒という訳ではなかったらしいけど、東方でキリスト教が勢力を増していた時に、その流れに乗らなかったのだから、一定自覚的な『異教徒(パガヌス)』だった事は間違いない。その上、皇族だった」

そして、それがユリアヌスの父が殺された理由の一つだったらしい。勿論、本質的には権力闘争だった。が、その最後の一押しでもあった。つまり、『異教徒』であるユリアヌスの父が権力を握れば、キリスト教徒は迫害されるかもしれない。だから……。

「殺らなければ、殺られる！――という訳で、キリスト教徒は、今の正帝コンスタンティウス二世に、僕の父を殺せ殺せと囁き続けたらしい」

「うー、駄目だ。意味がわからん」

トゥルートは頭痛がしてきた。自分が所詮は野蛮人だと心底自覚した。

「サルスティウス、この者を衛士に推薦した君は慧眼だったよ」とユリアヌスは苦笑した。

「で、その殺された『異教徒』の息子である僕はやはりキリスト教徒ではない。キリスト教徒の振る舞いはしているが、信仰を宣言はしないし、言葉の端々に『異教徒』の特徴がある。……見る目があるよ。実際、僕はキリスト教徒ではないからね」

ユリアヌスは苦笑のまま続ける。あとは父の時と同じだ。万が一、ユリアヌスが権力を握れば、キリスト教徒は迫害されるかもしれない。だから……。

「馬っ鹿じゃねえの。そいつら」トゥルートは率直に言った。本音だったし、怒りもあった。憧れだった修道士を汚されている気がした。「そんな理由で一々誰かを殺して回っているのか？　馬っ鹿じゃねえの……！」

「弁護しておくと、キリスト教徒には昔迫害された恐怖が残っているからね。それに熱心だ。東方では『イエス・キリストの神様率はどのくらいか？』で論争が続いている」

やはり馬鹿だ。トゥルートは確信した（それで今でも殺し合いをしていると知れば、さらに確信を深めただろう）。第一、そんな風に命を狙われ続ければ、

――今、笑っているこのユリアヌスも、いずれキリスト教徒を殺さねばならなくなる……。

が、ユリアヌスは笑みを崩さない。

「ただ、これは僕を殺したい理由としてはあくまで潜在的なものだ。何しろ、僕は【皇帝(インペラートル)】とはいっても、所詮は【副帝(カエサル)】であり、【正帝(アウグストゥス)】の僕(しもべ)に過ぎないからね。仮に迫害の意思があっても権限はない」

よって、父の時と同じで、動機としては最後の一押しでしかないという。ユリアヌス殺害を躊躇う者に『いや、これは神に逆らう異教徒を倒す正義の行いだ』と囁く程度だという。

それにしたって酷い話だ――とトゥルートは呆れた。

しかし、ユリアヌスにはさらに明確な脅威があるという。それが……、

「エウセビウスを首魁する宦官集団だ。この一派は僕に対し明確な殺意を持っている。一部のキリスト教徒達のような潜在的なものではない。極めて積極的具体的に僕は何度も殺されかけた」

政治上妥当な措置だったと言え、ユリアヌスの兄ガルスを嬉々として殺したのも、この一派だという。

「理由はわかりやすい。純粋な権力闘争だよ。最近の宮廷では【宦官(エウヌコス)】が幅を利かせている。今の正帝コンスタンティウス二世も幼少の頃から、宦官に育てられた。必然、宦官集団は重用されている。今では正帝に上奏する前に、必ず宦官に付け届けをしなきゃいけない有り様だ」

「……ろくでもない話だとは思う。でも、どうしてそいつらに殺されなきゃいけない？」

「世の中が宦官だけで回っているわけではないからさ」

「？？？」

トゥルートはさっぱりだったが、ユリアヌスは噛み砕いて説明してくれた。

今の正帝コンスタンティウス二世は外界から隔絶された後宮で宦官に育てられた。ある意味、宦官の洗脳の下にある。言わば、宦官の操り人形だ。しかし、子供の頃ならともかく、大人にもなれば、皇帝の職務に励まねばならない。そうすると、世の中が宦官だけで回っているわけではない――という素朴な事実に嫌でも気付く。甘言や佞言ばかり耳にしていると、ろくでもない事になると知る。

特に正帝コンスタンティウス二世は断じて暗愚ではない。勿論ユリアヌスのように最前線へ出たりはしない。が、帝国に危機あらば、やはり前線で指揮を執っているのだ。

そこで血を流して闘う将兵を目にすれば、

――日頃、周囲で自分を褒め称えるだけの宦官は『君側の奸』ではないか？

と当然の疑惑が出てくる。少なくとも、甘言や佞言では外敵は防げない。むしろ、優秀な将軍を重用すべきでは？　いや、軍事だけではない。内政でも、有能な官僚がいなければ、国は駄目になる。彼らも重用すべきだ。逆に

――おべっかを使うしか能のない宦官は……要らないのでは？

という平凡な結論に近づく。こうなると実務能力のない宦官ほど焦る。そこで出てくるのが、

――讒言（ざんげん）

である。あいつは不正を行っているとか、あいつは陰謀を行っているとか、宮廷政治の最も醜悪な病巣だった。その中でもとりわけ人気だったのが、

――陛下。正帝陛下が重用されているあの将軍は、陰で反逆を起こそうとしていますぞ！

だった。優秀な将軍がその実力を背景に、皇帝にとって代わろうとする事例は、古今東西、無数にある。だから、皇帝にも自然と疑心が生まれる。勿論、皇帝も大概は一蹴するのだが、そこは宦官の強み。日常的に皇帝に接するのだから、讒言の機会は無数にある。宦官が徒党を組み、揃って同じ内容を繰り返せば、皇帝はその讒言だけをずっと聞き続ける事になる。

これで正気を保てれば、むしろ異常だろう。

「救い難いのは今の宦官は予防措置として、この手の讒言を行っている事だね」

すなわち、現在、正帝の寵愛を受けている者だけでなく、将来、正帝の寵愛を受けるかもしれない者というだけで、讒言による排除の候補となるのだ。そうして、宦官は予め競争相手を取り除き、宦官同士の一体感を強め、さらに『反乱を未然に防いだ功労者』の顔をする。

……正帝コンスタンティウス二世だけでない。最近の宦官に育てられた皇帝には、皆、友がいない。過去のローマ皇帝たちに友がいた。真に心を許せる友だったかはわからない。だが、それでも友がいた。しかし、今の正帝達にはいない。本当に孤独なのだ。

本人の資質ではあり得ない。このユリアヌスですら『友達が（多くは）いない』のであって、『友達が（一人も）いない』わけではないのだ。コンスタンティウス達が揃いも揃って、友達づくりの才能が欠落している訳ではあるまい。

おそらく排除されたのだという。

「そして、今や宦官にとって、讒言は日常習慣になってしまっている」

息をするように讒言を行う。最早、自覚すらない。ガルスもユリアヌスも、その日常習慣の対象になった。

「幽閉されている時から、宦官の監視……と言うか、荒探しが酷くてねえ。僕も兄さんの件があってからは、特に気を付けていたんだけどさ……」

ユリアヌスのうんざりした口調は珍しかった。

「友達と話していると、反乱の相談をしているに違いない。一人で黙っていると、反乱の構想を練っているに違いない。表情や動作で誹謗中傷は当たり前。夏に青い服を着ていたら『あのように暖色系の色を避けるのは心にやましいところのある証拠』だってさ」

「……それは夏で暑いからじゃねーの？」

「僕も同じ事を言ったよ。そうしたら、『そのように顔を真っ赤にして、言い返すのはやはり後ろめたいところがあるに違いない』と返ってきた」

「……ヤクザのいちゃもんだな」

トゥルートはふと気付いた。ユリアヌスはガリアにやってきたのではなく、ガリアに逃げてきたのではなかろうか？　宦官たちの魔の手も、辺境ガリアならば、とりあえず届かない。

もっとも、そのガリアは宦官の陰湿な脅威ではなく、より明確な蛮族の脅威にさらされているが……。

「いや、つうかさ、それで国境の防備が損なわれたら、どうすんの？」

「というよりも、既に損なわれているのだ」

サルスティウスは口を挟んだ。

「ローマは絶望的に弱くなったわけでもない。実際、トゥルート、お前のような勇者もいる。装備、規律、戦術、兵站の面ではまだ世界一だ。あとはそれを指揮する優秀な将軍さえいればいい……というか、実際にいたのだ」

そういえば、トゥルートにも覚えがある。たしか、シルヴァヌスというローマの将軍が連戦連勝を続けた事がある。これで平和が戻ってくる。そんな風に大人達が語っていた。が、結局シルヴァヌスは反乱をおこし、鎮圧された。そして、優秀な将軍がいなくなったローマはまた戦乱に陥った。

思い返してみると、殺されたシルヴァヌスには同情の声が多かった。当時は意味がわからなかったが、今のユリアヌスと似た境遇だったのだろうか？　あのシルヴァヌスも……。

「シルヴァヌス様だけではない……！」

サルスティウスは静かに声を荒げた。珍しい事だったし、すぐに「いや、失礼」と落ち着きを取り戻した。いずれにせよ、若者二人は咎めなかった。サルスティウスはこの中で最年長だ。それだけ積った想いも深いのだろう。

「これまで何度も優秀な将軍が辺境に赴き、蛮族を破り、平和を取り戻しかけた。ところが、その度に宮廷からの横槍が入る。勿論、クラウディウス帝のように兵站の問題で引き戻すのは仕方がない。だが、反逆者として、殺されるのではたまったものではない」

これでは実際に反乱を企んでいるか否かは問題でなくなる。優秀な将軍は自衛のために反乱せざるをえなくなる。しかし、この手の反乱は場当たり的に起こされるので（これが逆説的に将軍たちの無実を証明している訳で）、案外あっさりと潰される。

「だけど、その結果、優秀な将軍が失われ、国境の防備が損なわれる。帝国領土は再び戦乱に陥る。その中から、再び優秀な将軍が出て来て、平和を取り戻しかけても、また讒言によって、反逆者にさせられ――の繰り返し……」

「いえ、繰り返しならばまだいいのです。しかしながら、戦乱で荒れた農地や傷ついた人民は

そうすぐに元へは戻りません。蓄えを使って、飢えをしのいでいるようなものです。これでは……」

遠くない内に破綻する――と、男二人は暗澹とした結論を導き出した。

三人の間を沈黙が支配した。

トゥルートは首を振って、それを破る。「だが、今は……」

「うん。そうだ」ユリアヌスは先んじた。「来年の不作を恐れる前に、今日の飢餓――さしずめ、この籠城を切りぬける事を考えねばならない」

「わかっているじゃねーか」

「君から学んだ事だ。ただ、同志とは情報の共有をやっておきたかった」

「……わかった。こっちも何とか頭に入れてみる」

本来ユリアヌスもサルスティウスも愚痴や悪口を言う人間ではない。誰かを貶す言葉を長々繰り返す馬鹿女とは違う。それだけに『欠席裁判』であっても、トゥルートは素直に受け容れられた。

が、これだけは確認しておきたい。

「しかし、思うんだが……取り巻きのキリスト教徒や宦官ではなく、その正帝当人に嫌われている可能性は？」

「ある。僕もその可能性は検討している」

ユリアヌスはきっぱり言った。サルスティウスも続ける。

「最初にユリアヌス様がガリア入りされた時、付き人の類がいなかっただろう？　トゥルート、あの時はお前の問いに答えられなかったが、今は答えよう。あれはキリスト教徒の疑念、宦官たちの悪意、……そして、正帝陛下への媚態の結果だ」

つまり、副帝ユリアヌスの成功を望んでいない派閥がある。その連中が遠回しに副帝の足を引っ張るのだ。また、そうでない者も、宮廷勢力に目を付けられたくない。だから、ユリアヌスへの助力を惜しむ。

【騎兵長官(マギステル＝エクイツム)】マルケルスが救援に来ない理由がまさにそれってわけですか？」

「私もマルケルス氏とは面識がある。為人(ひととなり)も多少は知っている。その上で私見を述べると……」サルスティウスは言葉を選んだ。「積極的にユリアヌス様を害したいわけではないだろう。ただ、宮廷からの婉曲な圧力があり、かつ、正帝が副帝の成功を望んでいないという憶測が、救援へ消極的にさせている。……そんなところだな」

「でも、正帝当人が本当に僕を嫌っていたら、そも僕を副帝に任命しない……はずだ」

ユリアヌスの口調には願望が混じっていた。考えてみれば、副帝ユリアヌスにとって、正帝コンスタンティウスは家族の仇であると同時に、最後に残った肉親なのだ。

「それと弁解になるけど、僕に消えて欲しい人達がいるにしても、こんな早く手を打ってくるとは思わなかったんだ。キリスト教徒が僕を殺したい理由は薄弱だ。何しろ、僕も対外的には

キリスト教徒だからね。宦官が僕を殺したい理由はそれに比べ強固だけど、やはり、脆弱だ。僕も勝ち進んでいるとはいえ、宦官を脅かす程の功績は立てていない。……だから、何かあるとしても当分先だと考えていたんだ」

そのせいで、ユリアヌスの対応は遅れた。しかし、逆にこれは『敵』もまだ一枚岩ではない証左とも見えた。ユリアヌスに消えて貰いたくとも、それはもう少し後――せめて、ガリアを平定した後――というのが理想的なはずなのだ。

何故なら【正帝（アウグストゥス）】はそれなりに【副帝（カエサル）】へ投資しているからだ。ここでユリアヌスに死んでもらっては大損だ。つまり、『反ユリアヌス派』の足並みは揃っていない。一部の急進派が先走っただけとみるべきだ。

というか、足並みが揃っていたら、こんな風に考える暇もなく、殺されている。

その先走りは痛打であったが、しかし、向こうにとっても博打（ばくち）のはずだ。何しろ、最高権力者である【正帝（アウグストゥス）】の意思に背く行いである。

「そこで僕も博打に出る」

ユリアヌスは密室の外に向かって、声をかける。

「シャハラザード、入ってきたまえ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝第八話（A.D.356）＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

彼女もしばらくは白を切ろうとしていた。

だが、ユリアヌスが「筆頭衛士（プリムス・リクトル）トゥルートよ、こちらも将兵の命がかかっている。この際、腕の一本二本は斬り落としてもいい」と言った途端に扉が開いた。

聞き耳を立てていたシャハラザードはばつが悪そうに部屋に入ってくる。

ユリアヌスはそんな彼女に問いかけた。

「ササン朝ペルシャ帝国非公式情報機関《千物語（ハザール・アフサーナ）》所属『シャハラザード』。ね、旅芸人が諜報員を兼ねているの？　それとも諜報員が旅芸人を兼ねているの？」

「……そんな事は知りません。仮に知っていても答えられるわけがありません」

シャハラザードはそっぽを向く。

「ただ、後学のために聞いておきたいんですけど、いつからわたしを疑っていたんですか？」

「最初から」ユリアヌスは種を明かす。「君が現れた時、僕もトゥルートも声をかけられるまで気付かなかった。鈍感な僕が気付かないのは当然だけど、トゥルートにまで気付かれなかったのは、やり過ぎだったね。我らが筆頭衛士の鋭敏さは人外じみているから」

そんなトゥルートに察知できないシャハラザードの異常さは逆に目立つ。

おそらく情報収集を兼ね、陰に潜んでいたのだろう。故に、シャハラザードが只者ではない――と二人ですぐに結論付けたのだ。

シャハラザードは美しい眉を寄せる。
「……それで私に何かご用でしょうか？」
「郵便配達を頼む。ここに僕が認(したた)めた手紙がある。これを一刻も早く届けて欲しい」
「いや、何で私に……？　それに何で私が……？」
「君に頼む理由はローマの通信網が信用できないからだ。君がやってくれる理由は報酬が用意できるからだ。金銭だけでなく、僕の傍に侍る特権を約束しよう」
これまでユリアヌスが出した救援命令に全く反応がない。だから、ローマの通信網が信用できない。おそらくマルケルスか、その背後にいる反ユリアヌス派の手で、情報が握り潰されているのだ。
だから、ローマではなくペルシャの通信網に頼る。隣国ペルシャがローマ国内に張り巡らしている諜報通信網なら、反ユリアヌス派も手は出せないというわけだ。
勿論、ペルシャは隣国であると同時に敵国でもある。だから、博打である事に変わりはない。第一、シャハラザードがこの要請を実行する保証はない。このまま籠城に付き合って死ぬのも嫌だろうから、城外への脱出まではやってくれるだろう。とはいえ、その後、とんずらされる危険がある。
しかし、ユリアヌスはやる価値のある博打だと考えた。
ローマもペルシャも敵国だが、大国だ。全面戦争をすれば、損耗はお互い激しい。その上、どう考えても互いの領土を占領などできない。仮に占領しても維持できない。それなら、交易して儲けた方が賢明だ。ペルシャ帝国がパルティア朝からササン朝に代わった今もこの構造は変わっていない。
そんな訳で、国境線をめぐって激しい戦いはあっても（それにしたところで、緩衝国の利権争いという形が多いが）、その間に交易が絶える事もなく、お互いを滅ぼそうなどとは考えていない。
まして、ユリアヌスがいるガリアはペルシャから離れた位置にある。どう考えても、侵略は無理で、直接は関係のない地域だ。シャハラザードが情報を集めていると言っても、おざなりである。だったら、ユリアヌスの側近になり、金銭を受け取り、情報を集め易い立場になった方が得なはずだ。
「それに……ペルシャとしては、西側の僕に一定強力になってもらった方が好ましいのでは？」
ユリアヌスは踏み込んだ発言をしてみた。サルスティウスの顔が青ざめ、トゥルートは首を傾げる。
だが、シャハラザードは
「嫌だなあ。わたしはそこまで愛国心とかないですよ。仕事です仕事」
と真偽のわからぬ事を言った。

「では、この仕事を受けてもらえるね？」
「……乗りかかった船です。承ります。それでどこへ行けばよろしいのです」
「メディオラムヌ（現ナポリ）だ」
ユリアヌスは皇后エウセビアへの手紙をシャハラザードに託した。

＊＊＊セノネス（現サンス）二十日目＊＊＊

「やっぱり、意味がわからん」
と、トゥルートは空腹を誤魔化すためにも尋ねてみた。
「何で、正帝本人ではなく、皇后の方に救援を求めるんだ？」
「正帝の皇后エウセビア様は才色兼備という言葉がまさに相応しい方なんだ」
ユリアヌスは恋する乙女のように頬を染める。
「高貴な生まれなんだけど、偉ぶったところはなくて。でも、動作の一つ一つに気品があって……何と言っても、聡明だ。トゥルートの判断力とシャハラザードの知識量を兼ね備えていると言えばいいかな？　話しているだけで、思わず平伏したくなる。僕がドキマギしていると、クスクスと笑って、気持ちを和らげてくれて。僕の恐縮が過ぎると、逆に子供みたいに拗ねて見せたりして、僕がガリアに来る時もプルタルコスの『対比列伝』をくれて……綺麗で、いい匂いがして……」
実はこの評価もそれなりに客観的なものだった。後世、皇后エウセビアはほとんどの史家に賞賛されるのだ。
だが、トゥルートの感想は簡潔になる。
「……人妻趣味かよ」
「な、ち、ちちちちっ違うよ！」
「あー、すまん。そうだな。お前は年上で頭よくって気が強い女が好みなんだな？」
「○×△■○×△■○×△■○×△■○×△■！！！」
ユリアヌスは一人錯乱して、意味不明の事を繰り返した。もはやギリシャ語ですらない。
――こいつ、本気で人妻に惚れていやがるのか？　意外と危ない趣味なんだな……。
トゥルートは驚きながらも、肝心な質問をする。
「で、頼りになるってわけか？」
「う、うん」ユリアヌスは正気を取り戻した。ただ、答えた声は鈍く。「正帝も人を信じようと努力している」
かつての《正帝（アウグストゥス）》コンスタンティウス二世には『信頼できる者』が一人もいなかった。
しかし、今は違う。
たった一人だが、その信頼を受け止められる人間が現れた。

それが皇后エウセビアだという。

「人間不信の正帝もあの皇后様だけには信頼を置くようになった。理由はわからな……いや、少しはわかるかな。エウセビア様も信頼できなくれば……もうおしまいだ」

ユリアヌスが生き残れた事自体、エウセビアの尽力故だという。兄ガルスの死後、弟であるユリアヌスも殺すべきという声は多かった。とりわけ、宦官の讒言と正帝自身の内なる猜疑が甚だしかった。

だが、皇后エウセビアは絶体絶命だったユリアヌスを唯一弁護し、正帝コンスタンティウス二世の信頼を勝ち取ったのだという。

「その後、ガリアに行って副帝になれって言われた時は驚いたけどね。……エウセビア様って、頭が良すぎて、時々、僕の理解が追い付かなくなる」

が、トゥルートにはわかる気がした。やはり、宦官対策だ。いつ、その魔の手が忍び寄るかわからないから、それが届かぬガリアにユリアヌスを逃がしたのだろう。

――才能を見抜いていたとしたら、女ではなく化けものだがな。

いわゆる『反ユリアヌス派』の中には『ド素人に激戦地の皇帝をやらせるのは……』というまっとうな意見もあったはずだ。ごり押しした皇后エウセビアの方が異常である。

しかし、今ではユリアヌスも兵士の信頼を集めつつある。奇襲に近かったコローニア奪還をまぐれと疑う者も、このセノネス籠城における稚拙だが堅実な粘り強さは讃えている。

「それに宦官と外戚というのは、大概仲が悪いものなんだ。はるか東方にあるという【絹の国(セリカ)】シナでも、これは変わらないらしい。元々、相補性の関係だしね」

だから、外戚筆頭とも言うべき皇后エウセビアは、宦官の専横を苦々しく思っている。

特に正帝への上奏が宦官の手で『編集』される傾向を危ぶんでいた。勿論、広大な領土からの膨大な情報は正帝一人の手に余る。誰かが取捨選択せねば、正帝が過労死するほど働いても判断が間に合わない。だから、間に宦官が入るのは必要だ。しかし、これでは宦官の『編集』次第で、正帝を操り人形にできてしまう。

「あるいは、正帝が皇后の言葉に重きを置くのも、その自覚がある故かもしれない」

派閥争いが相互監視として機能する典型だ。

そんな訳で、皇后エウセビアは独自の情報網を築いている。シャハラザードが所属しているであろう組織に比べれば、か細い。が、性質は酷似しており、何より、宦官の横槍が入らない。

「……それって、逆に言うと、普通に正帝へ助けを求めても、マルケルスみたいに……」

「うん。途中で握り潰される虞(おそれ)が強いって事。僕、一応副帝なんだけどね」

補足すると、メディオラムヌ（現ナポリ）に皇后がいる保証はない。だが、そこまで行けば、何とかシャハラザードは皇后の『目』に見つけてもらえるだろう。

「だけど……宦官ねえ。家畜ならともかく人間をわざわざ去勢するのか……」

田舎者のトゥルートには想像できない世界だった。

罪人への刑罰や敗者への処遇ならまだわかる。しかし、自ら望んで去勢したがる者もいるというから、理解不能だ。

この点、トゥルートには宦官の制度へ嫌悪があった。ユリアヌスやサルスティウスらは宦官たちの人格へ嫌悪があるらしいが、正直、それはピンとこない。殺されかかったユリアヌスに同情はする。そこに巻き込まれている以上、好意的にはなり得ない。だが、所詮、遠い世界の話なのだ。そも、宦官と官僚の違いがよくわからない。

――今、宦官が起している権力闘争も、宦官がいなければ、官僚が起こすだけなのでは？

と思う（後にユリアヌスに聞いてみると「……慧眼だね」と言われた）。

むしろ、一人の男をわざわざ傷付ける行為が制度化されている事そのものに、肉体的嫌悪を覚えるのだ。

ところが、東方育ち（オリエント）のユリアヌスは

「いや、やっぱり後宮なんかには宦官が必要なんだよ。だって、女性だけの世界だからね」

と制度そのものは理解があるらしい。

「何しろ、力仕事だってあるし……」

「女にやらせりゃいいじゃん」

現にトゥルートの家では女でも力仕事を任されていた。

「それに、書類仕事だってある」

「女にやらせりゃいいじゃん」

現にそのエウセビアは情報網を維持運営しているというではないか。

「……極端な話、治安維持は？」

「女にやらせりゃいいじゃん」

「……」

後の日本でいう【別式女（べつしきめ）】の類だ。が、こういった『（高貴な）女性に（肉体）労働をさせるという野蛮な発想』は、それこそ、日本や西欧のように古代文明の中心地から離れ、それ故『野蛮』だった国々のものだ。いわゆる『文明国』では通用しない。

しかし、トゥルートにはそれがわからなかった。

もっと言えば、東方の文明国とやらは女を甘やかし過ぎに思える。

――結局、あたしは野蛮人なのかな？

離れでセヴェルスは「もうすぐマルケルスが救けに来てくれる！」と負傷兵を励ましていた。

＊＊＊セノネス（現サンス）三十日目＊＊＊

シャハラザードは帰ってきた。

メディオラムヌ（現ナポリ）まで往復二十日だ。実に凄まじい。

そんな侮れないシャハラザードも、さすがに疲労困憊で汗と埃に塗れていた。日頃の芳香も淑美もない。開口一番「水（アクア）！」と要求し、トゥルート顔負けの蓮っ葉さで飲み干す。

物資不足の籠城兵が送る視線をものともしないシャハラザードに、

「はい、はい。マラソン（マラトン）、マラソン（マラトン）。お疲れ様。フィディピディスみたいにならないでね」とユリアヌスは気遣った。「あれ、エウクレスだっけ？」

「知らないわよ」シャハラザードは書簡三通を手渡す。そして、小声で付け加える。「ウザい。キモい。オタク死ね」

「ええーーっ！」

……なお、書簡は皇后と皇帝からの双方の返事だった。

ユリアヌスは癒しが欲しくて、三通あったうちの一通――皇后からの書簡のみを迷わず開封する。

――「ユリアヌス君、頑張っているみたいだね。あなたの評判はあたしの耳にも届いていましたよ。ところが、最近は連絡が途絶えていて心配していたの。まさかそんな事になっているなんて。本当にとんでもない話です。でも、任せて下さい。必ず何とかして見せます。大丈夫、あたしたちは家族なんだから　　あなたの義姉エウセビアより」

太陽のような皇后の笑みを思い出し、ユリアヌスの心臓は高鳴った。

隣でトゥルートが舌打ちしていた。

＊＊＊セノネス（現サンス）三十一日目＊＊＊

結果から見れば、シャハラザードの献身は徒労だったのかもしれない。

何故なら、野蛮人は自ら包囲を解き、いずこかへと去っていったのだ。冬が本格的になってきたので、これ以上の野営は無理という判断だったのだろう。そも、包囲はシャハラザードのように城外との通信が可能な程度だったのだ。彼らは彼らで食料の確保が困難かつ第一だったのだろう。

とはいえ、死地であったのは事実である。

なのに【騎兵長官（マギステル＝エクイツム）】マルケルスはのこのことやってきた。敵がいなくなってから、大軍を引き連れてやってきたのだ。

ユリアヌスは前置き抜きで伝える。

「マルケルス、君を【騎兵長官（マギステル＝エクイツム）】から解任する。後任はセヴェルスだ」

この場からはあえて外してあるが、セヴェルスの力量には文句がない。後を任せるに不安はない。満場一致の判断だった。

前任者と後任者の当人二人を除いて。

「な、何故……」

「命令不服従」
「私は私で必死に……」
「ならば、無能が罪だ」
ユリアヌスは簡潔に答えた。救援に来なかったのなら、命令不服従が罪である。救援に来れなかったのなら、無能が罪である。
言外の意図が伝わったかはわからない。ただ、元騎兵長官マルケルスは不満を隠さなかった。
「このような横暴……正帝コンスタンティウス様が……」
――それが理由か……！
吐き気がした。籠城末期にはユリアヌスも兵士たちも鼠を食って飢えをしのいだ。しかし、どぶ臭い鼠を口にした時ですら、ここまでの吐き気はしなかった。
――セヴェルスは最後まで君を信じようとしたんだぞ！
「あの方は市民を守る……ローマの皇帝だッ！」
ユリアヌスは叫びながら、例の二通目を突き付けていた。
開封した正帝からの書簡にはかくのごとくあった。
――「援兵が必要なら、直接要請すべし。遠慮や婉曲は無用である前に有害である。貴殿は副帝(カエサル)であり、その権限がある。また、ガリア、ブリタニア及びヒスパニアは貴殿に統治責任がある。従って、人事一切も貴殿に委任している　正帝コンスタンティウス二世より」
すなわち、正帝による全面支持といってもよい内容である。
マルケルスから余裕が消えた。
……そも勝算があったからこその博打だったのだ。
かつて、コンスタンティウスが親類縁者を皆殺しにした時、親類縁者は皆殺しにした。が、無関係な兵士を巻き込みはしなかった。……少なくとも、市民を巻き添えにはするまいとしていたのだ。
逆に兄ガルスを殺した理由も、兄が市民を殺めたからだ。その方法もまず兵権を解いた後、不必要な犠牲を出さないようにした上での裁判だった。
だから、ユリアヌスを殺すにしても、ユリアヌスのみを殺すだろう。命令通りガリアを平定している以上、ユリアヌスを殺す理由はないというだけでない。仮に殺すにしても、無関係なローマ兵士を巻き添えにするはずがないのである。
……わかっていた。あの正帝は家族の仇であり、猜疑心の塊である。だが、職務への責任に苦しむローマ皇帝でもあるのだ。
正帝は慎重というよりも臆病な男だ。いつも見えない恐怖にがたがた震えている男だ。あの皇后の前では赤子のように泣きじゃくる男だ。
そんな意気地無しが、しかし、ローマ皇帝としての己を人前では取り繕っている。
――僕と同じだ。僕と同じローマ皇帝なんだ。

「あの方は市民を守るローマの皇帝だ」ユリアヌスはもう一度繰り返した。「貴様と一緒にするな」

その一言でマルケルスは狂った。

正帝からの書簡を奪おうと手を伸ばす。だが、ユリアヌスが躱す必要もなく（正確には躱す能力がなかったのだが）、マルケルスは部下に取り押さえられた。

ユリアヌスの部下ではない。マルケルス自身の――数瞬前までの――部下に拘束されたのである。

――何故？

と問うまでもなかった。サルスティウスの推測は的中していたのだ。ユリアヌスの救援命令を握り潰していただけではない。自力で副帝の危機を察知した部隊もあったのだ。彼らは当然救援に行こうとした。それを騎兵長官の権限で押し止めていたからだ。「セノネスには親父もいるんです。助けに行かせて下さい！」と叫ぶ部下を『命令』で黙らせていたからだ。

あの時、生まれた怒りが、今、芽生えたのだ。

……マルケルスは何年かぶりに、一兵卒として仲間達を見る事になった。

兄弟なのか、城外と城内の兵士が抱き合っていた。お互いの無事を知り、泣いていた。

マルケルスには軽蔑の視線を送る新兵がいた。ユリアヌスには尊敬の視線を送る老兵がいた。

過去に兵士と共に辛苦を背負ったマルケルスは、しかし、それ故に現在の辛苦を厭った。

そんな過去がないユリアヌスは、しかし、それ故に兵士と共に現在の辛苦を背負った。

だから、彼らは今、この若き皇帝（カエサル）を支えようとしている。

……もう二度とマルケルスがあんな声望を集める事はない。

一つ悟った。

旧友セヴェルスがこの場にいないのは、この若者の慈悲だったのだ。

そして、若き皇帝ユリアヌスは書簡の三通目を開く。

「【戦友諸君（コンミリーテス）】よ、この冬は大いに英気を養い訓練に励みたまえ。夏にはゲルマン民族への拠点攻撃が始まる。正帝陛下の部隊も既に動いている」

自分と他人の中にある不安を拭うため、あえて正帝を強調した。

「そうだ。これは正副両帝東西共同作戦――帝国総力を結集した一大反攻作戦である！」

遂に《ローマの平和（パクス・ロマーナ）》を取り戻す夏が始まるのだ。